

活動名	子どもに関する映画の上映会と子どもワークショッププロジェクト The Film Screening on Childcare and the Children's Art Workshop
代表者氏名・所属	南陽 慶子：人間発達科学専攻 保育・児童学領域 D2
構成員氏名・所属	鈴木 瑛貴：比較社会文化学専攻 舞踊・表現行動学コース M1 児玉 理紗：人間発達科学専攻 保育・児童学領域 D3 林 志妍：人間発達科学専攻 保育・児童学領域 D4

私たちは「子どもに関する映画の上映会と子どもワークショッププロジェクト」を実施しました。本学には日本最初の幼稚園があり、在学生・教職員の子どもの対象とするいずみナーサリーがあるなど、昔も今も小さな子どもの育つ場が大学内に位置づいています。こうした歴史と伝統の中、保育・幼児教育に関する第一線の研究が積み重ねられてきています。しかし、こうした事実を保育系以外の学生は意外と知らないということから、本学の財産ともいべき“子ども”を取り巻く環境や取り組みを、より多くの学生と分かち合いたいと考えました。広く“子ども”という存在について感じ、考えるということは、様々な生き方や進路を考えるどの学生にとっても、感性、人間性、社会性を広げ、深める上で不可欠のことだと思います。そこで私たちは、本プロジェクトによって、様々な領域の学生が集い、子どもや保育、教育、表現について、共に考え、語り合い、刺激を受け合える場を創ることを目指し、またその交流と学び合いを通して、新しい視点による子ども向けワークショップを開発・実践することを目的として、連関する複数回の企画を行いました。

まず、2013年7月25日に、映画「こどもの時間」（監督：野中真理子）、10月18日に映画「さあのはらへいこう」（監督：桐野直子）の上映会を開催しました。生活科学部や文教育学部の学部生や院生、教職員や小学校・幼稚園の先生がそれぞれ約30名近く集まり、上映会後にはフリートークも実施しました。参加者からは、「1歳児があんなにもたくましいということに驚いた」、「(映画に描かれているような)あのような体験が今の子どもたちにとってなぜ必要なのか、言い換えれば現在の保育の現場は何を失っているのかを明らかにすることだと思う」などという声上がり、学年や世代を超えた人たちと、観た映画をもとに気軽に語り合い、思いを分かち合うことで、それぞれの考えを深めることになりました。



また、11月23日には、就学前の幼児を対象にしたワークショップの実践を行いました。映画上映会後に行われた8回にわたるディスカッションやワークショップのプランニングの過程では、上映会参加者の中から有志の学生（食品栄養科学コースなど）が加わり、子

子どもが全身で動けるような大きな布と絵の具を使った活動と、保護者のおやつ作りを同時開催することを計画しました。ワークショップには子ども16名とその保護者13名が集まり、上映会に参加した学生を含むスタッフ12名で活動を行いました。活動後の保護者へのアンケートでは、「普段はなかなかできない、思い切り汚れて絵の具で遊ぶという活動を体験でき、本人も楽しかったと喜んでいて」、「いきいきと手足を使い、のびのびと活動する子どもの表情が印象的だった」などという声が聞かれ、子どもの活動では100%、保護者の活動では80%以上の方に「とても良かった」との解答をいただきました。参加したスタッフからは「子どもの生のエネルギーを感じた」という感想などがあり、保育・教育現場で実際に自ら実践をする機会に乏しい学生にとって、貴重な機会になったと言えます。また、ワークショップ実践時は、ワークショップの過程を可視化する記録者（スクライバー）を活用し、保護者との情報共有や、活動後のスタッフの省察に役立てました。



本プロジェクトでは他領域、他学年の人と関わることで、それぞれの視点を広げることができました。上映会においては学部生、院生、現場の先生との話し合いから新たな気づきを得、またワークショップの準備から実践、振り返りに至るまでのプロセスの共有により、他スタッフからも刺激を得ることができました。普段接する機会のない人たちと“子ども”を通して交流することにより、各々が改めて自身の経験や専門を捉え直すことができたのではないかと思います。さらに本プロジェクトでは、食物、舞踊、保育という異なる領域の学生間の交流とコミュニケーションの場を生み、それぞれの専門性を活かした活動へと結実させることができました。学生間の学び合いに止まらず、本学における環境、設備、人材を活かした異領域のコラボレーションによる、新しい子どもの育ちの場の創出につながるはじめての一步でもあったように思います。

